

「主体的・対話的で深い学び」を保障する授業の具現化

平成30年度 社会科 のまとめ



○ 研究大会実践の解説

4年「函館大地震発生！命を守るためには？」

○ 研究大会の成果・課題を踏まえた実践

4年「みんなでごみを減らそう！～ごみはどこへ～」

実践者 鎌田尚吾

平成 30 年度 附属函館小学校研究について

平成 30 年度 北海道教育大学附属函館小学校 研究テーマ

「主体的・対話的で深い学び」を保障する授業の具現化
～「学びの文脈」に基づいた各教科等の単元のデザイン～

* 課題設定の理由と研究の経緯 については、「研究のまとめ」を参照して下さい。

1. 「単元のデザイン」とは

単元のデザイン

単元の目標を達成する（≡「資質・能力」の育成を目指す）ために…

- ① 単元の目標を分析し、目指す子供の姿に至るまでの**単元の構想**をする。
- ② ①を子供の**問題解決のストーリー**の視点で**整理**する。
- ③ 学びの文脈を生み出したり、つないだりする**支援**を**具体化**する。

まず前提として、授業づくりを行う時に重視しなくてはいけないのが、主体的・対話的で深い学びを通して、単元の目標を確実に達成することです。そのための、「単元のデザイン」は、本校では3つのステップにより行われています。

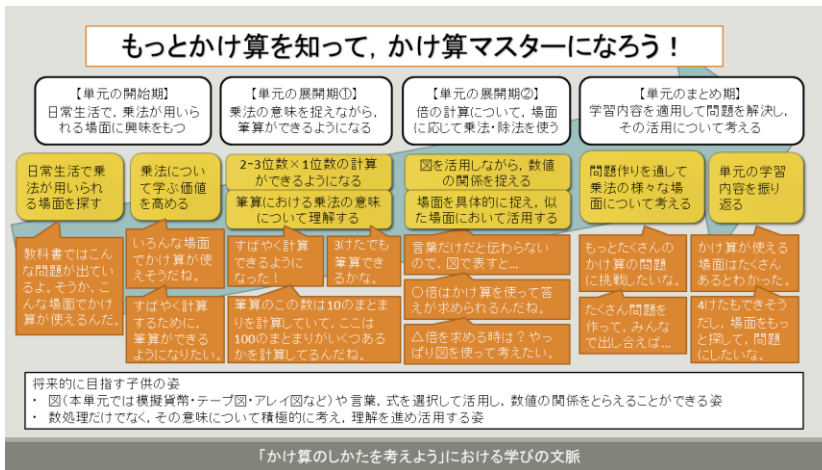
最初は、単元の目標を分析し、目指す子供の姿に至るまでの単元の構想をします。学習指導要領の内容を確認したり、各教科書会社の教科書を比較したりすることなどを通して、どのような学びを展開すれば、単元の目標が達成できるのかを考えます。その時、単元の終了時における目指す子供の姿から逆算し、どのような過程を経てその姿になるかを構想することも重要です。このようにして、単元の構想をすることが、第1のステップです。

次は、その学習活動の流れを、子供の問題解決のストーリーの視点で、整理します。先述の通り、主体的・対話的で深い学びを通して、資質・能力を獲得・育成していくには、子供が学びたいと思える「問題解決のストーリー」が重要になります。子供の実態を捉え、単元における問題（課題）を解決することに、必要感や必然性を感じるような単元になるよう整理することが、第2のステップです。

最後に、「学びの文脈」を生み出したり、つないだりするための教師の支援や手立てを具体化します。「学びの文脈」を通して、子供が主体的・対話的で深い学びをしていくには、適切な教師の関わりが重要です。それは時に直接的な関わり（対話や発問など）であったり、間接的な関わり（場の設定や環境整備など）であったりします。また、各教科等の特質や単元のもつ特性、児童の実態などにより、その手立ては多様になり得ると考えています。その手立てについて考え、単元の中で適切な支援ができるよう具体化していくことが、第3のステップです。

2. 単元における資質・能力の育成を支える「学びの文脈」

- ① 教科等の枠組みを踏まえながら、社会の中で活用できる資質・能力（国語力・数学力など）
 - ② 教科等を越えた全ての学習の基盤として生まれ活用される資質・能力（言語能力・情報活用能力など）
 - ③ 現代的な諸課題に対応できるようになるために必要な資質・能力（安全で安心な社会づくりのために必要な力など）
- 中央教育審議会答申（中教審 197 号）、p27



これまでの研究で、資質・能力の育成のために「学びの文脈」が重要であることはわかってきました。そして育成を目指す資質・能力については上の3つがあるとされています。

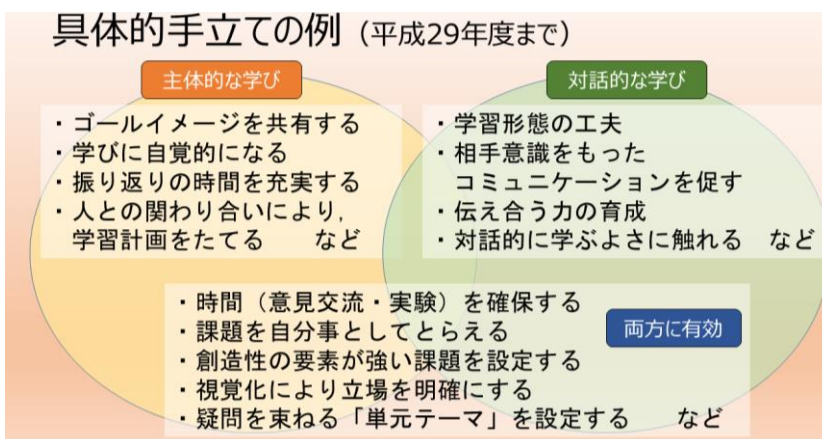
これまで本校では、「学びの文脈」は①の資質・能力の育成に資するものと考えてきました。

今年度は、本校において育成を目指す資質・能力の軸を①としながら、その単元で育成を目指す資質・能力

が②や③の資質・能力の育成にどのようにかわり、「学びの文脈」上でどのように表されるかを追究しています。

具体的には、単元の学習終了時や、その教科等を学び進めた時、あるいは将来的な（各教科等の目標に沿った）子供の姿として授業者がイメージし、それに向かう姿が見られようにすることに挑戦しています。そのために、指導案上で「学びの文脈」を図化することで、①の資質・能力の育成はもちろん、②や③の資質・能力とのつながりを捉えることができることを期待しています。

3. 「学びの文脈」を生み、つなげる具体的手立て



今回の研究では、これまでに行われてきた授業づくりにおける具体的な手立てを、各教科等の資質・能力の育成という視点からもう一度見直し、単元の学びをどのようにつないでいるのかを示すことに挑戦しています。これにより、授業にどんな学習活動を盛り込むことで「学びの文脈」を生み、資質・能力を育成することができるかを、より明確に見出すことができると考えました。

「学びの文脈」を”生み出す”ための手立ての多くは、単元や題材を選びません。また、教科等も限定されない（汎用性が高い）ことも多いです。例えば、「気づきを生む資料と出会う」ことや、気づきから「単元テーマ」を設定するなどの手立てです。その多くは教科横断的に活用できると言えます。

そして「学びの文脈」を”つなぐ”ための手立ては、各教科等の特質に応じて行われる（「見方・考え方」を鍛える）学びの場面で多く見られます。例えば、「教師との対話により目標に迫る」「既習との関連を明確にして統合的・発展的に学ぶ」などです。その多くは、より「深い学び」を実現する手立てとして、活用できると言えます。

社会科 研究大会実践の解説

単元名 4年「函館大地震発生！命を守るためには？」

(1) 単元における、資質・能力の育成を支える「学びの文脈」

本単元では、子供たちが「事象や人々の相互関係」の視点から

- ・ 地震発生時における関係機関の動きや協力などの「公助」を捉える。
- ・ 防ぎようがない地震災害の被害を最小限にし、命を守るための「自助」の取組の大切さを捉える。
- ・ 自分に必要な日常的な備えや緊急時の対応を想定する。

ことができるよう、「学びの文脈」を次の通り構想しました。

開始期

- ア 東北地方太平洋沖地震〔東日本大震災〕の様子を視聴する。
 イ 函館市では震度3以下の地震が65回も発生している事実を確認し、問題意識をもつ。
 ウ 単元テーマ「函館地震大発生！命を守るためには？」を設定する。

展開期

- エ 関係機関からお話を聞く（4回）。
 それぞれの機関の取組について理解し、携わる人の思いや願い、工夫や努力に気付くようにする。関係機関の連携・協力へと視野を広げ、避難、備蓄、倒壊への備えなど、日常的な備えに意識が向くようにする。

まとめ期

- オ 子供たちは関係機関の動きをまとめていく中で「公助」のそれぞれの役割を捉える。
 カ 東日本大震災において釜石市の児童生徒の99%が生存した理由を考え、「自助」の大切さや命を守る自分の行動について考える。

函館大地震発生！命を守るためには！？

【開始期】
その時！どうする？
～函館大地震発生！～

地震が起きたときに自分たちはどのような思いで、どのように対応するのか考えたり、関係機関がどのように対応するのかを予想したりする。

大阪地震、東日本大震災すごい被害だね…。函館でも、いつ起きるのかわからなくてこわい。今までにもあったのかな？

学校で地震が起きたら、まずは放送をしっかりと聞き、タタメットをかぶって、指示をしっかりと聞き、避難の仕方を守って迅速に避難！

家で地震が発生したときはどうしたらいいだろう？自分の家や地域のこともっと知らないで！

メーターの位置が低い…。夏休みに地震が起きても大丈夫なように、学習したことをまとめていこう！

【展開期】
レッツ調査！
～命を守るためには！？～

関係機関のそれぞれの動きや協力体制、自分の命を守る行動についてまとめる。
 ①函館地方気象台 ②函館市役所
 ③自衛隊 ④函館赤十字病院

気象台では、地震が起きる前から情報を手に入れて、関係機関に連絡するんだね。あわてずに身の安全の確保を！

自衛隊では、国からの命令によって、災害派遣活動(捜索・救助、水防、給水、物資の輸送など)を行うんだ。家の中で閉じ込められても、避難所でも生きていけば助けがくる！

警察や消防も協力するんだね。人々を守り、救うために関係機関が連携しているんだ。自分は避難場所や災害情報を確認し、迅速な避難をしなければ！

市役所では、防災計画のもと、情報伝達や避難勧告、応援要請をするんだね。避難のことや避難所を確認しておかないと！

函館赤十字病院では、地震があったときに救助活動を行っているんだ。自分でも簡単な応急処置ができるよ！

【まとめ期】
地震は予測できないけど…
～自分の命は自分で守る！～

東日本大震災の被害を受けた釜石市の児童生徒の状況から、自助について再考する。

こんなにすごい地震で津波もすごいのに、生存率99%！？どうしてそんなに助かったの？

一人一人が常に緊急時の避難を意識していたからなんだね。

防災・減災のためには、自分たちの日頃からの備えが何より大切だ。

メーターの位置は上がったよ！調査書も完成！地震対策はばっちりだ！

交通事故や火災は一人一人の安全意識で解決！でも地震は？

地震からたくさんの人が守ってくれる！でも自分たちの備えが何より必要だ！

【将来的に目指す姿】

- ・ 地震が発生した場合の関係機関の緊急的な備えや対応、連携など自分たちの命を守るための活動を理解する。
- ・ 様々な災害が起きたときの自分自身の命を守る行動の仕方を日常的に想定することができる。

(2)「学びの文脈」を生み、つなげる具体的手立て

学びの文脈を生み、つなげることができるよう、下記のような3つの手立てを行いました。

手立て① 「え!?!」「そうそう!」「学びたい!」を生み出し、イメージを構築するための資料提示

ア 地震発生時の対応について学ぶ必要感を高めるために、東日本大震災の映像を視聴するようにしました。

イ 関係機関の「人」が話していたことと実際の活動をさらにリンクすることができるよう、災害時の対応の様子がわかる資料を提示しました。

オ 思考のズレによって「どうしてそんなに助かることができたのだろうか?」という問いをもつことができるよう、釜石市の被害状況に対する児童生徒の生存率について具体的な数字と、他の地域と比較する資料を提示しました。



手立て② 「なるほど!」「すごい!」を引き出す、関係する「人」への聞き取り調査

イ 関係機関の働きや協力体制といった課題に関わる概念を形成したり、人の営みに共感・尊敬したりできるよう、「人」との関わり、そして振り返り場面を単元で意図的に設定しました。

子供たちがわかったことや考えたことを「地震対策調査書」としてまとめていくことで、自らの生活に生かそうとする思いを高めることができました。

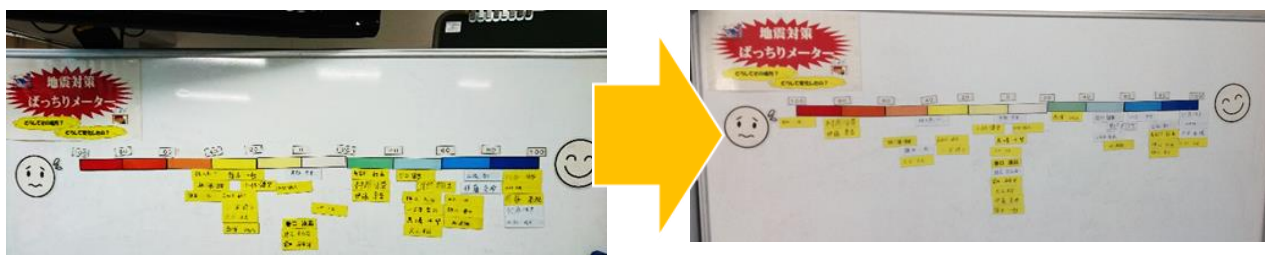
カ 「自助」に向けて子供の思いを高めることができるよう、函館気象台の方にご協力いただき、子供たちの考えを価値付けたり、これからの生活に向けて大切なことを話したりしてもらいました。



手立て③ 「自分は…」「みんなは?」の感情や思考を促す、心情メーターの活用と教師のかかわり

ウ〜カ 心情メーターを活用する。

様々な情報や思い、考えを交流する糸口として、単元を通して「地震対策ばっちりメーター」(10%ごと)を活用しました。一人一人の今の感情を示すことによって、その時点での自分の考えを明確にし、「他者の考えを聞いてみたい!」という思いを抱くことができ、「100%って避難グッズもそろえていないとだめじゃない?」「家から出られない時はどうしよう…。まだ下げなきゃ。」など、数値の意味をアップデートしていくことができました。



研究大会実践の成果と課題

成果

資料の効果的な活用や「人」との関わりによって、必要感をもって学びに向かい、社会的事象を捉えたり、携わる人の営みに共感したりしながら、自分の生活を考えることができました。

手立て1に関して、動画の視聴により、学習の動機付けを図ることができました。資料を効果的に見たり、情報を短時間で共有したりする点でICTはたいへん効果的であると感じました。

手立て2に関して、実際に地方気象台、市役所、陸上自衛隊、日本赤十字社の方々からお話を聞くことによって貴重な情報をもらったり、人々を助けるための努力や協力、大変さについて実感したりすることができました。「事象や人々の相互関係」の視点から、地震発生時における関係機関の働きや協力などの「公助」を捉えることにつながりました。

また一人一人が考えや思いをしっかりとつとめて、積極的に発言し、他者の考えに耳を傾けながら、社会的事象を多面的に捉え、自らの生活を多角的に考えることができました。手立て3では、子供たちの思いを可視化することによって、全員が自分の考えをもって話し合うことができました。自分や全体の変容が見え、学習の積み重ねを実感することができました。その際、「どうしてその場所なのか?」「前と比べて変化した理由は何か?」「同じ場所にいる人たちは同じ思いなのか?」などを教師が問いかけ、子どもたち一人一人が自分の考え、生活を再考する働きかけが効果的であったと感じています。

そして日常生活の中で、地震発生時の行動について家族と話し合ったり、実際の避難経路を確かめたり、防災グッズをそろえたりするなど、本単元の「学びの文脈」が生活の中に広がり、「いつ発生するかわからない」災害と向き合い、自分自身の安全を守る「自助」へとつながることができたと感じています。

課題

資料から、見学から、人の言葉から、子供たちがどのようなことを読み解き、どのように感じているのかをより明確にしていくことが大切であると感じました。

手立て3に関して、「どうしてその場所か」という根拠をより明確にもたせていく必要があると感じました。それは、思考力・判断力・表現力等における選択・判断する力につながっていくものと思います。

そのためには、手立て1の教師側の資料の精選、手立て2の関わる「人」との入念な打合せは必須です。そして単元のまとめ期において、子供たちが今までの学びを根拠として駆使し、解決するような学習問題を設定したり、自分の思いや考えの変容を確かめるような活動時間を保障したりすることで、学びを価値付けることができると考えています。

今後も、一人一人の思考を見取り、働きかけていきながら、子供たちが根拠をもとに考えを表出し、変容を実感できるようにしたいと考えます。

実践提案「根拠を大切にした単元作り」

4年「みんなでごみを減らそう！～ごみはどこへ～」

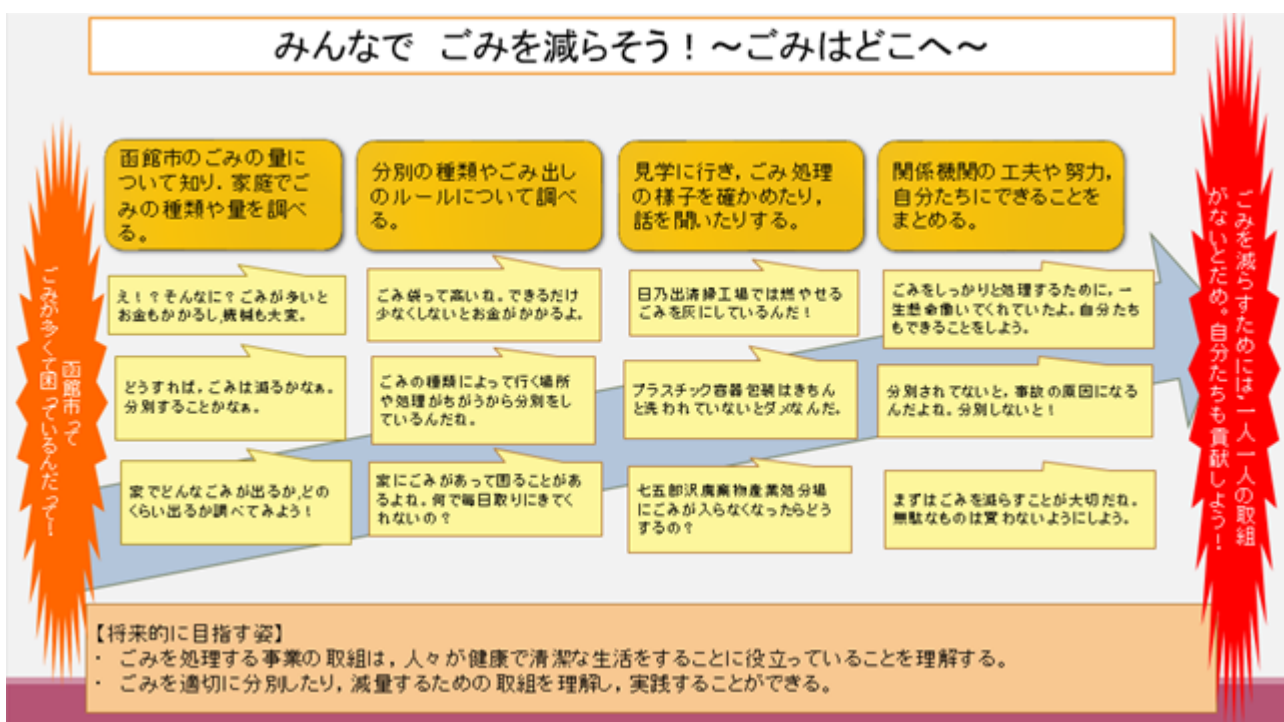
(1) 単元における、資質・能力の育成を支える「学びの文脈」

本単元では、子供たちが「事象や人々の相互関係」の視点から

- ・ ごみ処理の仕組みや再利用，人々の協力の様子や意味について理解する。
- ・ ごみを減量する自分自身の生活を考え，生かそうとする。

ことができるよう、「学びの文脈」を次の通り構想しました。

	開始期
ア 函館市のごみの量や家庭で出るごみについて知る。	開始期
イ 単元テーマ「ごみを減らそう！」を設定する。	
ウ 家庭で，どのようなごみがどれくらい出るのか調べる。	
エ 分別の種類やごみ出しのルールについて調べたり，ごみの量の変化との関係を考えたりする。	展開期
オ 見学に行き，ごみ処理の様子を確かめたり，働く人達の話の聞いたりする。	
カ 関係機関の工夫や努力，人々の思いや願いをまとめる。	まとめ期
キ ごみを減らすために自分たちができることを考える。	



(2)「学びの文脈」を生み、つなげる具体的手立て

学びの文脈を生み、つなげることができるよう、下記のような2つの手立てを行いました。

手立て① 問題意識を醸成し、根拠となるような資料・情報の活用

これまでの火災や交通事故、災害を扱った学習では、子供たちが単元導入期で「怖い」「不安」「心配」という思いをもつことによって、安全な生活を目指し「学ぶ・知る・考える」必要感を高めていくきっかけとなりました。ごみ処理について学ぶ本単元では、普段の生活と密接に関係するものの関心が低いごみについて問題意識をもつことができるよう、資料や情報を提示しました。

ア 函館市のごみの量や全国平均と比較する資料を提示しました。また、ごみ処理に関わる費用の多さやごみ処理の負担によって処理装置・設備の故障を招き、稼動しないことなどを示しました。子供たちは「このままではいけない!」「ごみを減らそう!」という思いをもち、「確かめたい」という思いをもって、実際に分別体験や見学・調査する活動に取り組んでいきました。

エ 函館市のごみの量の変化のグラフから、ごみの種類の増加に気付いたり、函館市のごみの量が急激に減った年に着目して理由を考えたりしました。この活動によって、子供たちは別の資料を見て情報を得たり、実際に確かめるために見学への意欲が高まったりしました。

また資料は基本的に函館市のものを主に扱っていましたが、近隣の七飯町や北斗市のごみ処理の様子（ごみ収集の様子、ごみカレンダーや分別表、ごみ袋の料金など）を示したり、子供たちが自ら収集したりすることによって、比較したり関連付けたりすることができました。

キ これまでの学びから、ごみを減らすためにどのようにすればいいのか考え、どうしてそのように考えたのかを交流しました。その際、子供自身が資料を実物投影機で写したり、情報を根拠として活用したりすることができました。

手立て② 予想と比較し、根拠となるような体験や見学による調査活動

研究大会実践では、「人」との関わりを充実し、人の思い・願いを理解することによって学びを広げたり深めたりすることができました。本単元でも、計4回のごみ処理施設見学や携わる人への調査活動を行います。事前に自分の家のごみを調べたり、分別作業をしたりすることによって、事前の子供たちの考えを明確にし、自分との比較ができるようにしました。このように、体験活動や知識の積み重ねによって、「人」との関わりの価値を高めていくことをねらいました。

ア 実際に分別体験をすることで、分別の基準や意味について考えたり、大変さを感じたりすることができました。ごみの選別作業は、働く人の手作業での選別作業への関心にもつながりました。

ウ 家庭で、どのようなごみが、どのくらい出るのか調べたり、調べる中で抱いた疑問や発見したことを交流したりしました。それぞれのごみカレンダーによって、ごみの収集日が地域によってちがうことに気付くこともできました。

オ 日乃出清掃工場（燃やせるごみ）・七五郎沢廃棄物最終処分場（燃やせないごみ・粗大ごみ）・プラスチック処理センター（プラスチック容器包装）・リサイクルセンター（かん・びん・ペットボトル）へ行き、ごみ処理事業の働きや人々の思いにふれることができました。きちんと分別をしなかったり、汚いままだったりするとごみは多くなり、手選別も大変になることがわかりました。

働く人たちは、子供たちが抱いていた疑問に回答したり、ごみを減らすための考えを聞いてアドバイスしたりしてくれました。



今年度の研究を通して

成果

今年度の研究実践で、子供たちは教室で思ったこと、考えたこと、気付いたことを家庭で確かめたり、家族とも話し合ったり、自分なりに調べたりしていました。そしてまた日常生活や家庭で、思ったことや考えたこと、気付いたこと、時には疑問に思ったこと、やってみたことなどを教室に持ち寄り、みんなで語り合うことができました。教師が「学びの文脈」を構想し、それを生み出したり、つないだりするための手立てを工夫することによって、子供たちは日常生活を含めた学びの中で、資質・能力を身に付けることができましたと思います。

社会科における適切な学習問題は、まさしく生活上の疑問や問題点として浮かび上がってくるものです。社会的事象は、子供たちのすぐそばに無数にあります。何を取り出し、どのように切り取って、どの程度まで示すのか、そこが社会科の醍醐味でもあり、難しいところでもあります。

課題

教師が子供たちに育みたい力をイメージしていくことが大事です。そのためには単元のプロセスやゴールイメージをもっておくことが必要です。その際、子供たちの「学びたい！」という必要感を醸成していくことを大切にすることで、より生活と結びついていく学習になっていくことがわかりました。子供たちの思いや願いに寄り添いながら、一人一人の物語を大切にしたいと思っています。そのためには、身近な社会的事象について、子供一人一人が具体的にどのような課題意識や学習への期待をもっているかを見取りながら、教師と子供、そして子供たち同士が対話することで、一人一人の思いを表出させ、どんな物語を作ろうとしているのかを共有することが必要になります。深い学びを実現するための主体的・対話的な学びを一層大事にし、子どもたち全員が切実な問いをもつため、そして単元が物語として流れていくために、今後教師の見取りや言葉による働きかけ、対話による関わりを一層充実させていきたいと思います。

実践を踏まえての展望

子供たち一人一人の物語を大切に、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指します。その中で、子供同士が「学びたい!」、「みんなと話し合いたい!」と思えるような教師の働きかけや資料提示の工夫、個人や先哲への尊敬・感謝（携わっている人や歴史人物の営みへの共感）の思いを育むことができるような外部リソース活用の充実を図っていきたいと考えています。

また、社会科を中心に、学校・家庭・地域をつなぐ（一体化する）単元の構想や構成によって、社会に開かれた教育課程の実現に寄与するとともに、子供たちが社会の構成員としての自覚と社会参画の芽を育むことを目指します。